



サイの御教え

一九六六年ダシヤラー祭連続講話⑧
理想の詩

今日、ヴィジャヤダシヤミー〔勝利の十日目〕は、
ここであれ他のどこであれ、至高の平安の館に住む者た
ちにとつて三重に神聖な日です。それは三つの河の聖水
が混ざり合う場であるトリヴェーニーと同じように神聖
です。今日はダシヤラー祭の「サマープティ」すなわち「終
結」であり、七日にわたつて供養礼拝と朗唱を行った
七日供儀の終結でもあり、さらには前回の化身の終結の
日、つまりシルディの肉体の入棺の日でもあります。「サ
マープティ」には「ブラフマンの至福に至ること」とい
う意味もあります。ですから、今日は言い尽くせないほ
どの至福に浸るチャンスがあるのです。

神我顕現に到達するために打ち込む靈性修行の二つの
段階、行為と礼拝は、口で述べることで、目で見ることが
できません。しかし、熟成の段階である英知は、目には見

えません。ヤムナー川に象徴される行為と、ガンジス川に象徴されるバクティ（神への愛、信愛）は、目には見えないサラワスティー川、つまり英知が流れる地点で、出会います。しかし今、人々は、行為を求める熱意、バクティを求める歓喜、英知を求める切望を失ってしまいました。真実の学識とは、人にアトマを明かすものことです。これらの事実が無視される時、神の化身が人間の義務であるダルマを再び教えるために現れます。今、再興されなければならないダルマ（道徳律）は何でしょう？それはサナータナダルマ（永遠の法）であり、それ以外にありません。

至高者だけを追い求めるべし

今でも、地上に聖仙がいないことはありません。現代でも、偉大なるカヴィ（詩聖）、マハープルシヤ、マハーパండిト（学僧）たちが、私たちと共に存在しています。しかし、華やかさや虚飾を狂信的に追い求め、他者に戦いを挑んで打ち負かそうとする興奮した争いの中で、彼らのメッセージを吸収し、彼らが定めた靈性修行の甘さ

を味わう時間がありません。同じ呼び名が使われていても、現代の詩人は昔のカヴィ（詩聖）とは比べようがありません。昔のカヴィ（詩聖）は意識を大変清らかに淨化していたので、詩の中にはつきりと神が映し出されていました。現代の詩人はあらゆる欠点や欠陥を抱えており、それらが程度の低い欲望に迎合しています。現代の詩人は、バクティよりも不機嫌さを表しています。感覚器官や激情を制しておらず、憎悪と貪欲の奴隷となっています。現代の詩人は、自分たちが広めているメッセージを神聖でないものにしていきます。なぜなら、彼らは低次の理想と安っぽい勝利を綴っているからです。そのような人たちに「詩人」と名乗る権利はありません。

五感が人の上に立つことを認めるべきではありません。五感とは人の管理下にある器官でなければいけません。五感とは単なる使用人であり、雑役夫であり、助手にすぎません。ナイフは果物や野菜を切るのに使うのが最も適しているものであり、あなたの喉を切るのに使うべきではありません。五感とは、鈍性（無力）や激性（激情）がなくなるよう訓練されなければなりません。五感とは、鈍感

であったり、のろのろとしているべきではありません。また、不活発であったり、危険なほど脇にそれるべきでもありません。属性〔激性・鈍性・浄性〕を克服しなければいけません。

ある学生がグルのもとに行き、平安への道を尋ねました。グルは、「それには、すべての人、すべての物事、すべての出来事に対する、忍耐を育てなければならぬ」と答えました。興味、反感、欲望を誘発するものが一切あつてはなりません。至高者だけを追い求めなければなりません。神だけを欲しなければなりません。

神と取引してはいけない

安定していて、変わることなく、減ることもない愛は、すべての世界の主への愛のみです。変化する愛は、変化する世界への愛です。バクタ〔神を愛する者〕が、何の目的も、何の報いを求める欲も持たずに、ただ純粋な信愛の気持ちで神仏の像の上に米を二粒置いた時、その米粒は金の粒に変わりました。もし何か目的を持っていた

ら、米粒は石に変わっていたでしょう。

今、人々は、「苦痛や悲嘆や喪失から救ってください、健康や力や富を授けてください」、と神に祈ります。けれども、もしあなたが神への執着を強め、神をあなたのものとするならば、神はあなたが必要とするすべてのものを、何とかしてあなたに与えるでしょう。「私にこれをください。そうすれば、交換にこれを差し上げます」と言つて、神との関係を取引におとしめてはなりません。賃金を要求するなら、あなたは雇われ人夫になります。神のものになりなさい。神は、怠け者にも、正気でない者にも、横着な者にも与えています。であれば、あなたに与えられないことがありますか？ 父親は、田畑や工場で働く息子がどんなに怠け者でも横着でも、あるいは勤勉でも、息子に食べ物を与えます。あなたが神に自分の財産のごく一部を捧げる時、あなたはその行為を、財産は自分のもので、自分の手は上にあり、受け取る者の手はその下にある、という慢心から行っているのです。

今日読まれた詩の一篇べんの中で、「なぜ神は、外を見る

目を授けていながら、目が外の世界をさまようと非難す

るのか？」という問いが上がっていました。それは違い

ます。目はさまよいません。目は、心の使者^{マインド}として、さ

まよっているのです。もし心が目に脇にそれるようと

命じれば、目はそれに従わなければなりません。その詩

人は、「神は人に正気でない心を授けた」とも非難しま

した。いいえ、心が正気でないことはありません。心は、

束縛を強めるためにも、緩めるためにも使えます。輪廻

と解脱は、どちらも心によって、もたらすことができま

す。あなたが選択権を持つているのです。心はその両方

の道具です。道具を非難するのではなく、使い方を非難

しなさい。

詩人は宣伝に携わってはなりません。詩人は、詩を長

くしたり語数を増やすために、行を付け加えたり、不

要な語句を挿入したりすべきではありません。感情や激

情をわざと強めようとすべきではありません。感情は、

その人の中身や人格から自然と高まってくる、自然なも

のでなければなりません。そうでなければ、詩はいびつ

になり、崇高なものから馬鹿げたものへと滑り落ちてし

まうでしょう。

あるブラフミンが、適切な場所で、ウダーツタ〔ヴェー

ダの三音中の高音〕とアヌダーツタ〔三音中の低音〕に

注意を払いつつ、慎重に正確にヴェーダを唱えていま

た。それを聞いた金貸しが、そのブラフミンに歌を歌っ

てほしいと頼みました。ブラフミンが自分は歌は知らな

いと断ると、金貸しは、もし要求に応じないなら、悲惨

な結果になると脅しました。ブラフミンは恐^{こわ}くなり、酷^{ひど}

い目にあうことから逃れるために、とつさにこう歌いま

した。

「私は歌えない。私は歌わない。しかし、この悪漢が

私に試しに歌わせたがっている。」

恐れや貪欲、疑いや否定が、詩人に表現を強要させる

べきではありません。自分の不完全さを社会のせいにし

て非難するのは、自分の頭痛を枕のせいにするのと同じ

です。

惑わされている人にささえ愛を持ちなさい

穀物が唐箕とうみにかけられると、無価値な殻は遠くに振り落とされ、ずっしりとした実は近くに山積みになります。低俗な新聞に見られる悪意のあるペンの卑劣な策略は、穀物から無価値な殻を取り除くのに役立ちます。誰も真実を揺るがすことはできません。誰も不実を打ち立てることはできません。私は真実に立脚しており、真実に正当な場所を確保するためにやって来ました。妬みと貪欲は人に策略を講じさせ、人の名誉と人格をわずかな銅貨と交換させてしまいます。愛によって、愛のみによって集まった、この大勢の人を見た時、ハートに愛がなく、嫌悪しかない人たちの中には、黙っていられない人もいます。そのような人たちは、嫌悪という毒を吐き出さなければなりません。

当然、どの時代にも、ラーマ、クリシュナ、シャンカラのような、人類を救うためにやって来たどんな者にも、そのような中傷者たちがいました。そうした中傷者に憎悪を抱いてはなりません。なぜならば、遅かれ早かれ、彼らも悔い改め、善くなることになっているのですから。

水に牛乳を加えたものが、牛乳の値段を付けて売られています。私に関する嘘うそを売って、彼らはいくらかのお金を稼いでいます！ヒルは、もうこれ以上吸えないというところまで吸い尽くすと、剥がれ落ちます。

「彼らが清らかな魂の持ち主へと変わりますように、そして、彼らの盲目が治りますように、彼らが全くの不実ではなく真実へと結びつくことができますように」と祈りなさい。憎悪ドウエリヤドウウシヤナは墮落へと導きます。愛は相互理解と共感へと導きます。惑わされている人たちにさえ、愛を持ちなさい。彼らも、じきに巡礼の道に加わることでしよう。

一九六六年十月二十三日

ダシャラー祭

Sathya Sai Speaks Vol.16 C35